

嘉慶四（1799）年八月上諭の訳注および考察（2） —清朝嘉慶維新研究序説—

相 原 佳 之
豊 岡 康 史
村 上 正 和
柳 静 我
李 侑 儒

はじめに

本稿は、「嘉慶四（1799）年八月上諭の訳注および考察（1）—清朝嘉慶維新序説」（『信州大学人文科学論集』8、2021年）に引き続き、嘉慶四年八月に出された上諭を現代日本語に翻訳し、若干の考察を加えるものである。

本研究は、著者らが清代中後期の政治社会史、とくに政策基調の変動に着目しつつ行ってきた、嘉慶帝が親政を開始した嘉慶四年の上諭訳注作業の一つである。関連する問題意識と研究動向等については、上記論文に引用される著者らの研究を参照されたい。

底本には中国第一歴史檔案館編『嘉慶道光兩朝上諭檔』（広西師範大学出版社、2000年）と、『仁宗睿皇帝実録』（中央研究院歴史語言研究所『清実録』データベース）を用いた。「No.○○○」と表記しているのが、『嘉慶道光兩朝上諭檔』所収の上諭である。

文中の【 】は嘉慶帝によって加筆・訂正された箇所である。「之」や「所」といった文章を整えるための修正や、意味の違いが生まれない微細な文言訂正については、繁雑さを避けるため省略している。（ ）は訳者による補足である。また『仁宗睿皇帝実録』に所収の白蓮教叛乱鎮圧にかかわる上諭については、紙幅の都合から割愛している。

・八月十六日

No.823

嘉慶四年八月十六日、内閣が命令を受けた。「光禄寺少卿の戴均元が、機会を見て各省の穀物備蓄を現物で買い補いたいと上奏した。そこには「外省の州県に設立している常平倉の穀物は、もともと民間で時に飢饉が発生するのを憂慮し、救済や米価の価格調整を行うためのものである。しかし近年では多くの地域で不足している。あるいは公用のため用いていながら補充しておらず、あるいは地方官が欠損を出していながら未だ交替せずに、大半を戸部

の定めた穀物価格を踏まえて銀両として蓄えて、それを流用して現物を確保する手間を省いている。規定通りに常平倉に穀物を蓄えているものは、全体の2割、3割もない。毎年秋の収穫時期になると、上級の役所はしばしば銀両を出して補充させようとするけれども、各州県は収穫が少なく、民の生活を妨げると理由をつけている。しかし実際は買い入れの資金を渡す時に、上級の役所の書吏らが上前をはねて費用を使い込み、購入費用が不足している。そのため地方官は、常平倉の補充は困難だとして行おうとしない」とあった。

上奏の内容は、現在の弊害を深く言い当てている。国家が設立した常平倉の穀物は、もとより民間での緩急の用に備えるためである。もし規定通りに穀物を備蓄せず、ただ穀物分の銀両だけを収蔵していたら、急に米穀が必要になった時にどうして救済できるだろうか。長らく別の用途に用いたままにしていること、購入費用があっても（米穀を買わずに）先延ばしにして有名無実になっていることは、いずれもあってはならない。さらに軍務のための輸送で、隣省がいずれも米穀を拠出しなければならない場合、いつも命令を受けて運送する段になってから、往々にして狼狽して失態を見せており、緊要な問題となっている。直隸・各省の総督・巡撫に命じて、管轄下に連絡して一律に調査し、事実を報告せよ。もし不足や銀両だけの収蔵があったなら、今年の秋の収穫期を期限とし、被災した州県については状況を踏まえて別に期限を設けて補充させるけれども、それ以外の各州県にはこの豊作の年に補充して穀物を備蓄させて、以前のようにただ銀両を収蔵してはならない。市場の価格上昇が心配であるが、これはその時々調整すべきものであり、言い訳にしてはならない。あわせて各役所の書吏が上前をはねる、強制的な取り立てるなどの弊害についても厳禁する。もしあえていい加減に取り繕い、真剣に対応しないならば、発覚した時に必ず各総督・巡撫と、欠損を出した各官員をそれぞれ処罰する。あらかじめ命令を受けていないと弁解してはならない。この命令を伝えよ。」

・八月十八日

No.830

嘉慶四年八月十八日、内閣が命令を受けた。「以前に広興に、達州に出立して軍糧を取り扱うよう命じ、忠州知州の劉清にも同行して協力するよう命じた。ただし劉清は知州であり、知府の職銜を加えたけれども、職分はやや低く、軍糧を取り扱うには不適切である。劉清は日頃より清廉で、深く民の信頼を得ている。特別に道員の職銜を与え、広興に随って業務に従事させる。もし道員の空きができれば、魁倫に昇任を提案させよ。忠州知州については、例に照らして後任を待つように。」

・八月十九日

No.832

嘉慶四年八月十九日、内閣が命令を受けた。「今年の正月初八日、朕は和珅と福長安を捕らえて処罰したが、それは彼ら二人が長年先帝の手厚い恩を受けながら、感激してそれに報いようとせず、結託して不正を働き、その罪は非常に重いものとなったので、国法によって処罰せざるを得なかったからである。これは朕が初めて政務に臨んだ時に、先帝の左右に控えていた大官たちににわかに罪を加えたものではない。ただし二人のうち、和珅の種々の不法行為は悪辣を極めており、また科道官の弾劾もあり、その状況は非常に深刻であったので、彼が生き延びられる道はなかった。そのため十八日にすぐに自殺を命じたのである。福長安は未だ弾劾を受けていない。しかし彼は和珅とともに軍機大臣の地位にあり、【その権勢や地位は同等であったけれども】、甘んじて和珅におもねり、主体性がなかった。また嘉慶元年以来、朕はしばしば彼を【召し出していた】。朕が泰陵に拝謁した時、【彼は一人随行したので】、道中の行宮で毎日、何度か召し出して、朕の意志をそれとなく示していた。朕は、和珅の普段の行為を隠すところ無く直言して欲しいと願っていたのである。しかし福長安は始終隠し立てして、一言も和珅に言及しなかった。良心を失い、自ら甘んじて和珅一党に付き従ったことは、甚だ恨むべきである。そのため特に逮捕を命じたが、これは朕の意志によるもので、他人が告発したものではない。大学士・九卿らは斬立決としたけれども、朕は斬監候という寛容な処置にかえた。たとえ福長安自らに反省・自問させたとしても、真実に基づいておらず、罪も妥当ではないと言い得るであろうか。もし罪を定めた後で、別に劣業を弾劾してくる者がいれば、当然ながら罪状を踏まえて追求すればよく、福長安に肩入れしているわけではない。

今、彼を監禁してからすでに半年がたち、彼のような斬監候を告げられた人物の権勢を、誰がまた恐れるであろうか。しかしついに、他に彼に言及する者はいなかった。このことは、福長安の高官としての振る舞いに、指摘すべき点がないわけではないが、罪状が多岐にわたっており、朝廷全体に深く恨まれていた和珅とは違いがある。現在は朝審も既に終わり、処罰も既に定められた。考えてみるに、福長安は二十年あまりの間、先帝に養われてきた。たとえ彼が愚鈍無知であり、恩を感じないとしても、朕は今まさに心を痛めており、かつて先帝が使った器物や犬馬であっても捨て置くには忍びない。ましてや福長安にはわずかながら功績がある。たとえるなら、子犬が禁中で養われていたようなものであろうか。現在は棺を山陵に移す時である。福長安に少しでも人の心があれば、必ずや重罪を得て棺を見送れないことに、心を痛めて涙を流し、深く悔いることであろう。たとえ彼にこのような心がなかったとしても、朕としては忍びがたいものがある。福長安を特別に釈放するように。

彼は普段、先帝の前で常に茶を進呈していた。今、彼を裕陵に派遣して、永遠に茶を捧げる拜唐阿に任命し、陵墓にて先帝の深い恩を感じさせ、時に内省を加えさせる。父親である

傅恒の墓もその付近にあるので、福長安は父がかねてより引き立てられて、永くその名を留めたことを追憶し、自分は臣下の道、人の子の道において、今はどの様になったのかを必ずや自問するであろう。彼の子である雲騎尉の錫麟もまた同行させ、綿億らに与えて使わせる。福長安には釈放後、十日の猶予を与えて、かつて没収した財産の引き取りに当てさせるように。

以前より臣下らの中で、貪婪のため罪を得た者がいれば、その財産を没収していた。総じて、その罪の軽重を見ているのであり、財産の多寡を計算しているわけではない。不正に多額の財産を蓄えた場合でも、和珅のような者は今までいなかった。春に財産の調査没収が行われた後、真珠の首飾りや圭式案（玉の入れ物）のような、もとより臣下に下賜すべきではないものを除き、その他の礼服や日用品については、王公・文武大官・乾清門の侍衛らの品級や職分に応じて全て下賜した。下は宮中の太監にいたるまで、あまねく賞賜を求めない者はいなかった。残して和孝公主に与えたものはまた数え切れないほどである。零細で破損した物品や古くなった物品だけは、崇文門に引き渡して販売させたが、その価格は幾ばくもなかった。これは人々が共に知っていることである。福長安から没収した品々の中で、彼が先帝の九十歳の万万寿、朕の四十歳の万寿に進呈するために準備していたものは、返還する必要はない。今、その他の品々は、おおむね日を分けて返還している。朕は福長安の罪名が定まった時、今返還している品々を、総管太監らに別に記録させておいた。朕は先帝が健在であった時に仕えていた旧人については、まことに庇護して、厳しく処罰することはない。国法に従っているのであり、財産を目当てとしているのではないことを、全ての内外の【大小の臣下ら】に周知させなければならない。今回の全ての顛末を、特に【内外に】知らせよ。」

・八月二十日

No.838

嘉慶四年八月二十日、内閣が命令を受けた。「劉權之（都察院左都御史）が、常平倉の穀物備蓄を買い入れる際には近隣の県で調達し、民に負担をかけるのを避けるべきであると上奏した。その内容は実行すべきである。常平倉の穀物買い入れについては、以前より規定があった。しかし今、劉權之の上奏には、「地方官の対応はいい加減なもので、往々にして買い入れを利用して私腹を肥やしている。現地で買い入れる場合、市場価格の高低にかかわらず、ただ銀四～五錢ほどを出すだけでありながら、時価通りに購入した領収書を出して強制的に受け取らせている。さらに差役による諸経費の要求もあるため、領収書を受け取った家でも穀物の納付を願わず、当初（政府より）支払われた銀両を返却し、追加で金銭を支払ったとしても、穀物を納めるよりも簡便だとしている。甚だしい場合は、有力な素封家が書吏と結託して、自身の負担すべき穀物を零細な土地所有者に分散させているため、素封家はわずかばかりを負担し、善良な民は衣食にも欠くようになっており、買い入れの害を深く受け

ている。地方官はただ穀物購入のために納付された金銭を自身の懐に入れているため、穀物を安価で抛出する年がきても、蓄えられている米穀がない。一旦、隣省の救済に協力する段になれば、あわてて米商人に準備させているものの、市場価格から上前をはねている。米穀を運送する時には、運搬を担当する家人や胥役らが商店に対して様々な言いがかりをつけている」とあった。

数々の弊害は、実に免れないことである。これを特に各省の総督・巡撫に通達する。以後、常平倉の穀物を買入れ年になれば、管轄下の州県に命じて、豊作の近隣の県から市場価格で公平に調達すべきであり、地方に買い付けを命じてはいけない。以前からの地方官と結託して不正を働く胥吏の悪習については、厳しく調査・禁止し、案件ごとに重く懲罰を与えて、常平倉に実際に蓄えがあり、小民に害を及ぼさないようにせよ。

社倉については、本来は現地の富裕層が義挙を好んで寄付し、貧民の借り出しに備えるためのものである。近頃は官が運営しているが、大半の米穀は理由をつけて流用されており、長期にわたって返還されていない。もし余裕があったなら、管理している責任者の士人と胥吏が密かに盗んで売り出している。そのため不作の年になっても穀物がなく、富裕層は寄付を喜ばず、老成した責任者の士人は管理を引き受けたがらない。以前からの良法が、いたずらに官吏に侵害されてしまっており、一律にこうした行為を禁止すべきである。また各省の総督・巡撫に命じて、各省の社倉については現地の富裕層の中から謹厳実直な者を選んで運営させて、官吏が関与してはならない。このようにして欠陥を防いで民の食を豊かにさせよ。各省の総督・巡撫には管轄下の州県を監督させて、力を尽くして実行させよ。もし前述の弊害があれば、すぐに事実可依拠して弾劾せよ。もし空文とみなして以前の轍を踏んで、朕が察知するか、或いは科道官に弾劾されるかした場合は、必ず総督・巡撫も重く処罰する。この命令を伝えよ。」

No.839

軍機大臣が総督の職位を持つ湖南巡撫の姜晟に伝える。嘉慶四年八月二十日、命令を受けた。「都察院が以下の事柄を上奏した。湖北省安陸県の生員である沈從隆が、徳安府知府の盛徳昌を訴えた。書吏の沈鵬万と應山県の家人である戴陞らが相談の上、難民救済のための米穀を盗み出して売ろうとしたところ、沈從隆の子で生員の沈逢巽によって察知・阻止された。盛徳昌はこれを恨んで、書吏の劉朝棟に命じて鍾清をそそのかせて、沈逢巽が未亡人の張氏を娶ろうとしたとかつての案件を訴えさせ、さらに沈逢巽の生員資格を剥奪して鎖につなぎ、好き勝手に拷問を加えて離縁させようとしたところ、張氏が首をくくってしまったが、助けることができた。また安陸県では白蓮教の反乱以後、団練・郷勇の費用はみな民間からの寄付に頼っている。知府の盛徳昌はさらに銀一千八百両余りを強制的に民間に負担させておきながら、中央政府への費用申請も過大なものにねつ造した。また安徽省に米数万石を送って貧民を救済する時に、盛徳昌は規定数を送らず、数千石を盗み出して売却し、生員の

王万寧らに訴えられて未だに結審していない。

【以上の】事柄が【もしみな事実であれば、このような民を害する劣員をなお許しておけようか】。この案では沈從隆の子である沈逢巽が張氏と再婚したが、既に調査を経て、結託して悪事を働いた事情はなかったため、結婚の成立を命じた。盛徳昌が書吏に命じて訴訟を蒸し返させたのは、恨みを抱いて濡れ衣を着せようとしたものである。沈從隆が訴えてきた、徳安府の商人が、難民救済のための米穀を盗み出して売却しようとした一件は、虚偽ではないだろう。地方の団練・郷勇費用を民間自らが集めておきながら、徳安府ではさらに強制的に費用を負担させ、政府へ申請する費用をねつ造したこと、また救済のための米穀を盗み出して売却したことは、すでに沈逢巽の訴えを受け付けていながら、なぜ長い間先延ばしにして結審しないのか。もし訴え出た内容が事実であれば、救済に関する事柄であるので、必ずや厳しく調査処罰すべきである。

姜晟は以前に上京を願い出てきたが、永順府に水害があったので、該地で調査させて、救済事業を執り行うよう命じた。しかしこれらの山間部での水位上昇は、普段からの事であり、また長期にわたっているため、当然、調査・対処はすべきであるが、実施すべき救済事業があれば、管轄下の州県に命じて適切に対処させるのがよい。現在、沈從隆が訴えてきた、救済のための米穀を盗み出して販売したこと、政府に虚偽の費用を申請し、地方に強制的に負担をかけたことは、非常に悪質である。倭什布（湖広総督）は現在、白蓮教の賊匪防衛にあたっており、高杞（湖北巡撫）は軍事費用の運営を行っている。【近年、属員を庇い立てする地方の悪習は、牢として破ることができない。もし現任の上司に審理を命じたなら、必ずや嘘偽りがあるだろう】。姜晟に命じて、道中に湖北に向かわせて、訴えられてきた各項目について厳しく調査を行わせるように。盛徳昌を解任して取り調べて、事情を明らかにした後、すぐに事実に依拠して弾劾し、少しでも隠し立てをして、【朕の意志に背いて】、罪を犯してはいけない。姜晟は案件が決着した後に再び来京しても遅くはない。都察院から提出された上奏文を、送付して閲覧させよ。この命令を伝えよ。」命令に従い伝える¹。

No.840

嘉慶四年八月二十日、内閣が命令を受けた。「都察院が上奏した、湖北省安陸県の生員である沈從隆が、知府の盛徳昌によって、私怨のために彼の子である沈逢巽が鎖につながれ監禁されたと訴えてきた一件については、既に命令を下して姜晟（湖南巡撫）を審理と対処に行かせた。朕が提出された訴えを見ると、彼の子が監獄に入れられ、数十余斤もある大鎖で足かせ、手かせをはめられていると記されていた。以前、地方官が勝手に班館や自新所を設置していたので、厳しく禁止命令を出した。刑具については、みな刑部の規定に従って官が

1 八月二十三日には、湖北省の民人である張必海が、知県と書吏による税の二重徴収を訴えてきた。嘉慶帝は姜晟に、沈從隆が訴えた本件とあわせて調査するよう命じた（No.854）。

印を押したものを配布しており、一定の長さや形態がある。もし勝手に刑具を作り、不法に用いているのなら、厳しく通達した禁令に反している。【蘇州には新たに製造された小夾棍などがあり、湖北にもまた】数十斤の大鎖があるというが、これらは私造ではなくて何であるというのか。ましてや官が刑具を準備しているのは、もとより犯罪者の罪の軽重を勘案して、それぞれ処罰するためである。たとえ邪教に対しての場合であっても、政府が定めた刑具を用いるべきである。ましてや通常の案件を取り調べる際にも勝手に刑具を作り用いて、それを恣に用いているのなら、厳しい法を利用して自分の酷薄な心を満たしていることになり、これを厳しく禁止しないで、どうして吏治を肅正し、民の心を得られようか。各省の総督・巡撫に命じて、属員に厳しく通達させよ。以後、全ての刑具は官が定めた寸法に従い、官印が押されてあるものを用いるように。もし自ら刑具を考案し、不法にも濫用する者がいれば、すぐに厳しく弾劾して罪に問い、決して許しはしない。」

・八月二十一日

No.843

嘉慶四年八月二十一日、内閣が命令を受けた。「鄒炳泰（内閣学士）が、秋審の案件内に刑部が緩決と改めた湖北省の李中才について、取り調べた原文書を踏まえ、情実にすべきである」と上奏してきた。そこで特に刑部に命じて、原案を進呈させた。朕が詳しく見てみると、陳恪は陳世得を恨んでおり、邪教を学んでいると誣告して、李中才らを逮捕に向かわせようとした。李中才は誤信して承諾した。陳恪と劉明友は先に到着して火を放って、陳世得を殺傷し焼死させた。李中才はその場におらず、後になって到着すると阻止しようとしたが、陳世得の嫁の王氏に罵られたために殴りかかった。まだ手を下さないうちに、王氏はかわして逃げる途中でころび、抱えていた娘を手放してしまい、その娘は焼死してしまった。これが、李中才が事前に恨みを抱いていた事情を知らず、妄りに逮捕に向かった経緯である。

放火と殺人は、みな既に処刑された陳恪らが行ったことで、李中才はその場にいなかった。ただ罵られて殴ろうとして、誤って王氏の娘を死なせてしまったのである。もし殴りかかろうとしなければ、ただ同案の王潮太と同様に一律に杖刑に処せられるべきであった。刑部が鬪毆律に依拠して、人の娘を誤って死なせてしまったので、絞首刑としながら緩決に入れたのは、なお情と法の均衡を保ったものであり、【処分を誤った罪はない】。たとえ情実に入れたとしても、決して死刑を執行する判断には至らないであろう。刑部によるこの事件の処置に誤りはない。李中才は刑部の量刑変更の提案通りに緩決とする。以前より秋審では九卿らが協議して、それぞれが見解を述べることになっているが、鄒炳泰もまた不適切な所はない。以後、秋審・朝審の時には、九卿らはなお公平に協議して、無実の者を処罰せず、適切に量刑を行うようにせよ。」

No.844

嘉慶四年八月二十一日、内閣が命令を受けた。「江蘭（兵部右侍郎）の上奏には、「官兵を護送して直隸の拱極・良郷に赴いたところ、該營の塘撥には汎に詰める兵が一人もおらず、また文武の官員も誰一人そこで護送を担当していなかった」とあった。各省で塘汎を設立し、規定の兵を設けているのは、もとより奸匪を摘発し、盜賊を捕らえ、派遣された使者を護送するためであり、一律に規律を整え、威儀を正し、厳しく査察すべしである。今、拱極・良郷の二營は京師の近郊にありながら、それでもこのように廃れている。その他の直隸・各省の状況は問わずとも知れる。胡季堂（直隸総督）が近日中に来京するので、彼の到着を待ってから江蘭の上奏文を閲覽させ、事実上依拠して調査させるほか、各省の総督・巡撫・提督・総兵らに伝えて規律を整えさせ、塘汎の兵士等を査察させ、以前通りの怠惰な状態で罪を犯すようなことをさせてはならない。」

・八月二十二日

No.845

軍機大臣が盛京將軍の琳寧、盛京刑部侍郎の瑚圖札に伝える。嘉慶四年八月二十二日、命令を受けた。「琳寧らが、嘉慶五年の給与支払いのための銀百三十万両を受け取りたいと上奏した。盛京で必要な経費に不足が出た場合、規定に従って銀両を発給するべきである。ただし現在は直隸で先帝の棺を送るための準備を行っており、また兵士らの派遣や軍需物資の輸送などもあって、非常に多くの人夫、車両を必要としている。もしまた盛京に給与支給のための銀両を運べば、地方に必要な人夫、車両が無くなってしまおうであろう。琳寧らに伝える。該地で永遠に貯蔵しておく銀一千万両のほかに、別の項目で貯蔵している銀両があるのか、あるとすればどの程度の額かを調査して、先に支出せよ。また以前、内務府が乾隆三十五年から四十三年にかけて盛京に発給した銀二百二十万両は何に使ったのか、調査して上奏せよ。もしまだ残っているなら、現在、集めて用いればよい。不足する銀両は、永遠に貯蔵しておく銀両の中から、一時的に銀百万両を用いることを許す。軍事費の目処が立てば、また京師からその額を発給する。琳寧らは真剣に調査をして、余分な費用を節約し、適切に運営して、わずかでも無駄があってはならない。この命令を伝えよ。」命令に従い伝える。

No.847

嘉慶四年八月二十二日、命令を受けた。「今回徴収した盈余銀三万九千九百三十四両あまりのうち、錢保（山海関監督）には銀一千九百三十四両あまりを賞与せよ。残りの銀三万八千両は、円明園に渡すように。」山海関盈余銀。

No.848

調べたところ、山海関監督は、嘉慶元年に朝慶が任期内に徴収した税額のうち、羨余銀（税収のうち、当初の規定額を差し引いた後の余剰額）については、円明園に銀五万七千両を引き渡し、残りの銀三千両あまりを監督の朝慶に賞与した。嘉慶二年に徳新の任期内に徴収した羨余銀については、円明園に銀五万八千両を引き渡し、残りの銀三千両あまりを徳新に賞与した。嘉慶三年の承露の任期内の羨余銀は非常に少ないため、賞与はしなかった。現在の監督である錢保が、銀五万三千七百七十一両の羨余銀があると上奏してきたが、これは本年に公式に定めた羨余銀よりも、なお銀四千二百八十四両あまり上回っている。そのうち、各所に引き渡す銀一万三千八百三十六両あまりを除くと、実際には銀三万九千九百三十四両あまりが京師に送られることになる。これを全て円明園に引き渡すのか、それとも監督の錢保に幾ばくかを賞与するのか、指示を請う。謹んで上奏する。八月二十二日。

・八月二十三日

No.856

嘉慶四年八月二十三日、内閣が命令を受けた。「富綱（雲貴総督）が、雲南省石屏州などで地震が発生し、現在救済に当たっていると上奏した。今回の石屏州および境界を接する建水県の二カ所で発生した地震は突然のもので、建物は倒壊し、中には傷つき亡くなった者もあり、特に憐れみを覚える。富綱は現在人を派遣して銀両を運ばせ、被害状況の調査や救済を行っている。同時に、石屏州にはいままで大汎が設けられていなかったのので、別に参将や守備を派遣して被害状況の監督・調査をさせている。その対応はいずれも妥当である。倒壊した建物や傷つき亡くなった人数を調査し、規定に従って都城や役所、監獄、穀物倉庫の確認を行う以外に、富綱らは属員を督率して真剣に対応し、救済措置をとることで、一人たりとも居所を失わせず、被災者を痛切に労る朕の意志に応えるように。」

・八月二十四日

No.858

嘉慶四年八月二十四日、内閣が命令を受けた。「陳大文（山東巡撫）が、水が溜まって被害を受けた地域と、雨後の窪地の様子について上奏した。山東省は今年、夏・秋の間の降雨量が多く、低地にある田畑はまま水害を受けたので、収穫量も減少するであろう。もし例に照らして税を徴収すれば、民は困窮することになるので、以前に命令を下して陳大文に被災地の様子を調査させ、事実可依拠して報告するよう命じた。今回の上奏によると、済寧・魚臺・金郷・単県・臨清衛・済寧衛など六カ所は、もともと水害の被害がやや大きく、今また雨水の被害も受けている。特別に該州県・衛には、今年徴収すべき新旧の錢糧と漕運米を一

律に来年の秋の収穫後まで先延ばしにする。嘉祥県・嶧県・滕県・城武県の四カ所は窪地であるため収穫量は少なくなる。特別に今年徴収すべき新旧の錢糧と漕運米を一律に来年の秋の収穫後まで先延ばしにする。十分に実りのあった田畑は、今年の錢糧と漕運米を全て徴収するが、長年の未納分はまた来年の秋まで待ってから一括して徴収を続ける。

また長清・德州衛・東阿・平陰・利津・蒲臺・汶上・陽穀・鉅野・范県・鄆城・朝城・博平・茌平・清平・莘県・恩県・聊城・博興・高苑・樂安はみな被災地域の中にあり、寿光県・臨清州・夏津・武城など二十五個所の窪地部の田畑は水害を被っている。いずれも一県の中の一区画であり、調査したところ被災したとまではいえないが、秋の収穫は減少するであろう。実りのあった田畑については、これまで通り徴収するけれども、水害を受けた窪地については、今年の錢糧と漕運米、以前よりの未納分は特別に来年の秋まで徴収を待つ。以上の各地域で水害を被って納税を猶予された各戸には、いずれも陳大文が例に照らして麦の貸し付けを行い、また食料も支給して救済の一助とし、来年の秋になってからの徴収とあわせて返還させる。陳大文は属員を督率して真剣に対応し、小民に確かな恩恵を行き渡らせて、朕の被災地域に対する憐れみの意に応えるように。」

No.859

嘉慶四年八月二十四日、内閣が命令を受けた。「陳大文（山東巡撫）が、山東省の漕運米はやはり規定通りに春に徴収し、運送したいと上奏した。もともと山東省の漕運米は、十月に川辺まで運び、翌年の二月になってから運送を始めており、それで問題はなかった。その後、冬のうちに徴収と運送を行うように改めた。期限が早くなったため、徴収と運搬は切迫することになり、米の質も一律に保てなくなった。漕運米を徴収する州県、それを受け取る旗丁は、いつも急かされているのを理由にして不正を働いている。また運送の開始が十月以前になれば、急いで水門を通過したとしても、途中で河川が凍結してしまい、翌年の二月になって氷がとけてからはじめて前進することができる。重荷を積んだまま停泊すること三ヶ月もの長きにわたり、米や豆などは湿気を吸ってしまう。また数十万石の漕運米を河辺で乾燥させることになると、失火の恐れもあり、停泊地ではまた兵士らによる巡回が必要となる。旗丁らが雇った操舵手や水夫らも船団で養わなくてはならず、さらに費用がかさんでしまう。冬の徴収、運搬は有名無実といえよう。以後、山東省の漕運米は以前の規定通りに徴収をはじめて河辺に運ばせ、立春より後に受け取りが終わってから、順次北上して通州まで輸送させれば、運搬に便利であり旗丁への配慮もかない、両得である。」

・八月二十五日

No.866

軍機大臣が浙江巡撫の玉徳、江蘇巡撫の岳起に伝える。嘉慶四年八月二十五日、命令を受

けた。「玉徳らが、宜興（前江蘇巡撫）を弾劾した各項目と、甄輔廷が生員をほしいままに責め立てたおおよその情形について調査した。確認したところ、上奏は非常に詳細であった。宜興が道府を接見する時に南面して属員に爺とよばせていた件、傲慢な性格で酒に溺れていたといった各件については、玉徳らが調査したところ、そのような事実はなかったが、面会時の付け届けについては、家人の常兄らが受領したと供述している。輜で通るには蘇州の街道が狭すぎたため、地方官が商店に店先の手すりを撤去させたことも事実であった。

上司が属員から面会時の付け届けを受け取ることは、久しく禁じられている。今回の家人が大胆にも受け取ったという一件だけでも、宜興は言い逃れできない。玉徳に命じて再び詳細に取り調べをさせよ。もし宜興が自ら受け取っていたのであれば、必ずその金額を計算して律に則って処分案を定めるように。たとえ事情を知らなかったとしても、家人の管理が行き届かなかった罪は逃れがたい。【断じて庇い立ててはならないが、無理に罪に陥れる必要もない】。蘇州では人が密集しており、街道はもともと狭くなっている。朕が皇考の南巡に随行した時、子供や老人たちが道を挟んで歓迎し、皇考は彼らを顧みて非常に喜ばれた。宜興は輜で進みにくいからといって、ついには店舗の手すりを取り壊させた。属員に阻止されたとはいえ、尊大で人々を労る気持ちのないことはおおよそ明らかである。もし他の件がなかったとしても、この二件について、玉徳はすみやかに宜興の処分案を定めて上奏するように。

また李焜・甄輔廷にはともに得るべき罪があるので、律に照らして処分案を定めるように。寛容に処置してはいけない。生員の馬照は袁仁虎らに同じ庠生らを煽動させ、彼の書いた文章の中には「声気幸甚」などの語があった。断じて分に安んじる者ではなく、必ず懲罰を加えるべきである。錢樾（江蘇学政）は玉徳らと協議して取り調べた後で、本当に無実であることを確認してから、名誉を回復させるべきであった。錢樾は既に、朱光勲らがみな連座させられた者であったために、衣冠・頂戴を返還している。また馬照・袁仁虎・王元辰といった当初の煽動者についても、謁見した時に命令を受けたと称して、衣冠・頂戴を返還したが、まことに何を考えているのか。錢樾が謁見にきた時に、朕は生員たちがもし不当に抑圧されたのであれば、衣冠・頂戴を返還すべきであると命じたが、馬照ら三名【だけ】を指名したわけではない。なぜ錢樾は彼らの名誉回復を認めたのか。特に誤っている。人気取りをしようと劣悪な生員らを庇護したのであれば、将来彼らが今回の件を恃みとして問題を起こし、地域を牛耳るようになった時、錢樾も必ず連座させて罪に問う。錢樾に訓戒を伝えよ。馬照ら煽動した首謀者については、得るべき罪があるので、玉徳らに命じてあわせて処分案を定めて上奏させよ。偏りや遅延があってはならない。この命令を伝えよ。」命令に従い伝える。

・八月二十六日

No.869

軍機大臣が各省の総督・巡撫に伝える。嘉慶四年八月二十六日、命令を受けた。「朕が『世祖章皇帝実録』を繙いたところ、戸部侍郎の林起龍が緑營の兵制について上奏していた。上奏には、「統制のとれた軍隊は兵数が少なくても大軍に匹敵し、軍糧もより節約できる。兵が強ければ国は富むのである。統制のとれていない軍隊は兵数が多くても少数の相手にかなわず、軍糧はより多くなる。兵が弱ければ国は貧しくなる。今、天下の緑營の兵士はほとんど六十万にもなるが、地方の有事の際、満洲の大軍派遣を求めてきた。六十万もの大軍であっても、数万の軍の働きに及ばない。その理由を考えると、将官が任に赴くのに際して使用人を募集して従軍させ、彼らに軍糧を支給し、衛兵・従者・楽隊・輜かき人夫まで兵丁としている。甚だしい場合、地方にやや裕福な家があれば、その子弟や親族まで兵丁として登録し、税負担を免除させて、毎月の軍糧は管理者のものとしている。また馬兵がうけとる飼料についても、中抜きがあって不足している場合が多い。駅伝で馬が不足すると、また軍中から借りて対応している。そのため馬はみなやせこけ、鞭をふるっても進まない。また弓矢・刀槍・甲冑・火器などの武具も、みな古くなり破れ壊れている。軍營のテント・雨を避けるための天幕・雨具・弓矢を収める筒などは、従来から備わっていない。また春と秋の二度の訓練もついに行われていない。将官は部隊の配置や戦闘のあり方を知らず、兵士は行軍の仕方も知らず、いたずらに国費を浪費し、民の財産を枯渇させている。百万の大軍であったとしても、何の益があるのか。その大病は二つある。一つは、兵丁はもとより反乱の平定をするための存在であるのに、今では盗賊の逮捕を責務としている。一つは、軍糧を出して兵を養うのは、もとより戦争に備えるためであるのに、今では中抜きされて、兵丁が得られるのはわずかに生活ができる程度の額でしかない。また毎月支払われておらず、貧しい兵丁はどうやって自活すればよいのか。今、天下に五十万の緑營の兵丁がいる。ここから二十万人の精鋭を抜き出し、四十万人分の軍糧を支給すれば、軍糧は篤く兵士は精悍となって、地方の警備は行き届き、戦いにも守備にも人を得て、十年もしないうちに国庫を豊かにできるであろう。」

我が世祖章皇帝は、上奏の内容が的確に弊害を指摘しているため、詳細に議論するよう命じた。朕は親政を始めてから、各省の軍隊の規律が弛んでいたもので、しばしば命令を下して、各省の総督や巡撫らに綱紀肅正に務めさせた。しかし前に阿迪斯（直隸提督代理）が、歴代の古北口の提督が兵丁を輜かき人夫に充てて、軍糧を支給していたと上奏した。また倭什布（湖広総督）の上奏では、山西省の兵士を湖北省に派遣したところ、将官が兵丁を服役させ、監督が厳しすぎたため、恨みを抱いた兵士たちが管理責任のあった参将の王棟を斬殺した²。これはみな、総督・巡撫・提督・総兵らが普段から訓練を行わず、兵丁らの遊蕩に任せていたために生じたのである。また役所では兵丁を役所の雑務係や職人として使っているため、

部隊に入れて訓練を行う余裕がない。ついに長年の積弊となって、兵丁らは規律がどういうものかを知らない。かつて林起龍が上奏した各種の弊害と全く一致している。

総督・巡撫らに命じる。管轄下の軍隊の綱紀肅正を図り訓練の実施に努め、武器や馬匹を随時点検して、みな整頓して利用できるようにせよ。あわせて兵丁を他の役に充当し、軍糧の中抜きや、支給の遅延を禁じる。もしこうした弊害があれば、すみやかに厳しく弾劾して処置し、それによって勇気を持ち道義を知り、軍政が厳粛なものになるようにせよ。もし実現に尽力せず以前の轍を踏むならば、ひとたび察知した後、必ずや総督・巡撫らを重く処罰し、決して許しはしない。林起龍の上奏にあった精鋭を選抜するという一節は、これにならって実現できるかどうかを総督・巡撫にあわせて議論させ、上奏させよ。この命令を伝えよ。」命令に従い伝える。

No.870

嘉慶四年八月二十六日、内閣閣が命令を受けた。「朱珪（吏部尚書）と劉樞之（都察院左都御史）が、洪亮吉から投じられた書信と詩句を進呈しなかったのを理由に、自らを担当局部からの厳加議処にするようお願い出てきた。洪亮吉の文章は出鱈目であり、朱珪と劉樞之は目を通したのであれば、即座に進呈すべきであったが、朕の命令を受けてから始めて差し出してきた。もし満洲人がこれらの文書を投じたなら、彼らはすぐさま進呈したであろう。朱珪と劉樞之は翰林院出身であるため、意図的に擁護しようとしたのは否定しがたい。ただし朱珪は普段から品行方正で、劉樞之がこれまで逐次上奏してきた内容は、いずれも事実を踏まえた詳細なものであった。彼らは厳加議処をお願い出てきたけれども、特別に都察院と吏部にゆだねて議処とする³。」

No.873

嘉慶四年八月二十六日、命令を受けた。「三法司（刑部、都察院、大理寺）が四川省の秋審のうち、考慮すべき事情がある囚人について報告してきた。朕が各案件の状況を詳しく見たところ、雷三貴・唐泰・唐通謨は提案通り死刑を免じた上で減刑とする。妻を殴り殺してしまった周万成・楊作元は、父母を罵られたためのこととはいえ、殺意があった。死罪は免じるけれども、それ以上の減刑は必要ない。

黄奇については、王文魁・王文堂が彼の豚を盗み出したため、隣人の袁公礼・葉大成とと

2 兵士による王棟の殺害と、守備の馬光祖による事件の隠蔽については、『仁宗睿皇帝実録』巻五十、嘉慶四年八月二十五日に詳細に記載されている。

3 八月二十五日、軍機大臣が嘉慶帝に、成親王のもとに届けられた洪亮吉の意見書を提出した（No.867）。『仁宗睿皇帝実録』巻五十、嘉慶四年八月二十六日では「尋議降三級調用。得旨、改為降三級留任」とある。洪亮吉の生涯や建言については、片岡一忠『洪亮吉 清朝知識人の生き方』研文出版、2013が詳細に論じる。

もに追跡し、前方に二人が豚をつれているのを目撃した。黄奇は怒鳴りつけて捕らえようとしたが、王文魁が身につけていた刀を抜いた。黄奇は彼らが身を翻して抵抗するのではないかと恐れて、石を拾って王文魁を殴りつけたのである。その時、王文堂が身を翻して助けようとしたので、黄奇はまた石を使って殴りつけ、袁公礼らとともに二人を縛り上げ、木の枝で打ち付けた。このとき王文魁が恣に罵ったので、連打して殺害したのである。王文堂の傷はすでに回復している。魁倫（四川総督）は黄奇を可矜にした。三法司は罪人が刀を抜いて抵抗したのには論拠があるとし、魁倫の提案を踏まえて検討・報告した。これを踏まえて考えてみるに、この案件は黄奇が窃盗にあって追跡する中で、賊と盗まれた豚を目にしたものである。追いかけている時に、もし王文魁が刀を抜いて身を翻して切りかかり【（黄奇が）傷を受けたなら】、実際に抵抗したことになり、可矜にして死罪を免じるべきである。今、事件の経緯を見ると、黄奇は王文魁が刀を抜いたことで、身を翻して抵抗するのではと恐れて、石を拾って殴りつけたのである。王文魁は実際にはまだ身を翻しておらず、盗んだ豚を守ろうとして抵抗はしていないので、これでは逮捕を拒んだとはいえない。さらに犯人らを捕らえた後、地方官に送って処置するのではなく、身勝手な怒りで凶悪にも殺殺してしまった。まさに罪人が既に捕らえられているにもかかわらず、恣に殺害した例と合致する。たとえ絞首刑とはしなくとも、可矜にするのは不適切である。黄奇は緩決に入れよ。その他は提案通りでよい。」

No.874

臣等が謹んで、命令に従って厳しく取り調べて協議した処分案を上奏する。臣等が命令に従い、洪亮吉が記していた各項目について逐一取り調べて、彼の自筆の供述書を御覧に呈したところ、「洪亮吉を解任し、軍機王大臣にゆだねて刑部とともに厳しく取り調べて処分案を上奏せよ」と命令を受けた。臣等が再び刑部とともに取り調べたが、供述の内容は変わらなかった。何度も洪亮吉を問い詰めたものの、依然として事実関係を指摘できなかった。ただ地面に伏して叩頭して泣き叫び涙を流し、「自分は愚かな小臣で政治を知らず、一時のいい加減な気持ちから筆に任せて意見書を書いた。しかし今、各項目について指摘を受けて夢から醒めたようで、取り返しのつかないことをしたと後悔している。重く処罰して欲しい」と述べるばかりであった。

洪亮吉は表層的な小儒で、幸運にも翰林院に入ったものの、名教に則って身を慎み、分に従った恭順な態度を示そうとはせず、ついにはみだりに異議を唱えて好き勝手に吠え立てた。洪亮吉は「陛下がまず憲皇帝（雍正帝）の厳明を、後に仁皇帝（康熙帝）の寛仁を模範とすべきである」と述べた。我が朝の祖先はみな文武神聖にして、徳威はみな等しい。洪亮吉は小臣でありながらみだりに先代を評価し比較したが、全く狂謬である。さらに洪亮吉は、「三月・四月以来、陛下が朝政の場に出るのが遅かったのは、おそらくは俳優や近侍の者が惑わせたためであろう」と述べていた。わが陛下は親政を始めてから昼夜を問わず政務

に励み、いささかも安逸に耽っていない。現在は喪に服しており、その哀慕の心は手厚く、孝心は明らかである。およそ知識を持つ者であれば、その想いを共有しないことはない。洪亮吉が敢えて、心に抱くのさえ忍びない、口に出すのも憚られるような内容の事柄を、ほしのままに誹謗したことは、最も許しがたい罪である。

各項目で言及されている内容については、和珅を師と認めていた孫士毅・寶光鼐・吳省蘭、和珅に膝を屈していた李綬・蔣賜榮・韓鐸、夜中に和珅に国子監祭酒代理の職を求めて、講官になった胡長齡・汪滋畹らのことは⁴、みな既に処刑された和珅の任期内のことで、大半は亡くなっている。さらに以前には、和珅に付き従っていた者に累を及ぼすことはなく、追求する必要はないという命令を受けている。

また洪亮吉は、以下のように称している。人々が賞賛している劉清は必ずしも優れているわけではない。人々が恨んでいる戴如煌、重罪を得た秦承恩（元陝西巡撫）、惠齡（兵部右侍郎。元湖北巡撫の代理）、悪名を得ている張誠基（江西巡撫）、陳文緯（山西布政使）、通恩（湖南布政使）、恩明（河南布政使）らはいまだ厳しく処罰されていない。さらに称するには、軍機章京の章煦が、陛下に師弟と認められたいと願ひ、御製詩の様子を探り、賄賂を送って優等に選ばれようとした。亡くなった两江総督の李奉翰が付け届けを受け取っていた。江南の楊天相は濡れ衣をきせられたままであるのは、みな蘇凌阿⁵が賄賂を受け取って法を蔑ろにしたためである。

これらについて取り調べたところ、洪亮吉はいずれもみな伝聞にすぎず、全く事実関係を指摘できないと称した。さらに劉清はすでに命令によって道員の職銜を与えられており、広興に従って職務に従事している。秦承恩はすでに解任されたけれども、城を閉ざして賊を避けて難民が河に身を投じた事情はなかったため、特別に釈放されている。惠齡は何度も賊の首領格を捕らえていたので、特別に兵部右侍郎への格下げとした。楊天相の件は今調査中であるが、洪亮吉は全くあずかり知らないことである。その建言の内容は寝言に等しいので、処罰はしないけれども、洪亮吉は翰林院の所属であり、たとえ時事について意見を述べるにしても、広く言路を開いている今は自ら封章を準備して、所属する役所を通して提出すべきである。ましてや陛下の日常生活や政治に口出しをして、全く政治に影響のない話を妄りに書き記して各処に投じた。その心積もりはさらに理解できない。わが陛下が日夜政務に励み、安寧を求めていることは、内外の臣民がみな知っている。洪亮吉が外から何かを述べても、どうして日月のような陛下を傷つけることができようか。ただ君に無礼をはたらいた罪は許されるものではない。ましてや敢えて恣に誹謗中傷を行うなど、実に喪心病狂、人とし

4 胡長齡は乾隆六十年に侍講学士から国子監祭酒になっている。汪滋畹については、嘉慶三年二月に「稽察房少詹事戴衢亨陞任内閣学士所遺講官一缺、謹選得現署講官之檢討汪滋畹、堪以充補」（内閣大庫檔案 144431-001）とある。

5 乾隆六十年に江蘇巡撫（刑部尚書署）、嘉慶元年から二年の两江総督。

ての道理を失っている。洪亮吉は大不敬律に照らして、斬立決にする。洪亮吉が投じた意見書と詩詞をあわせて進呈する。臣等がともに取り調べて定めた処分案を謹んで上奏し、命令を請う。八月二十六日。

『仁宗睿皇帝実録』 卷五十

また命じる。策拔克（科布多参贊大臣）の上奏には、「従犯として馬を盗んで秋審で情実に入れられた推伯斯は、母一人子一人であるため、母親を養わせたい」とあった。蒙古の律内には、留養の条目はない。今、策拔克が律に照らして推伯斯を母親を養わせたいと願ひ出てきたので、その通りとし、推伯斯の絞首刑を免じて例に照らして留養を認め、朕の中外を分かつことなく等しく恩を施そうとする意思を示す。

・八月二十七日

No.879

嘉慶四年八月二十七日、内閣が命令を受けた。「今年の正月、朕が親政を始めた当初に特に広く言路を開くよう命じたのは、もとより内外の臣下たちに意見を提出させ、利害を指摘させて、広く意見を集めて政治に役立てようとしたのであり、（臣下らは）国家の運営や民の生活に関する事だけでなく官吏の弾劾でもみな隠し立てせずに直言するべきである。朕は政務を執る際、もし正しい事柄を諫言してくる者がいれば、それを虚心坦懐に受け入れて、特別に抜擢し、それによって官位にある者たちを励ますであろう。しかし半年あまりが過ぎ、政務について提案してくる者は数多くいたが、いまだ朕自身を正そうとする者はいなかった。朕は時に深く慎み、夜郎自大な心持ちを少しも持たないように心がけてきた。

先頃、軍機大臣らが、洪亮吉が成親王に渡した書信を進呈してきたが、根拠がなく全く出鱈目なものであった。洪亮吉は翰林院編修であり、かつて上書房に勤めていた。もし上奏すべき事柄があるのなら、もとより自ら封章を準備して朕の前に直接届けるか、翰林院掌院学士や面識のある大官が代わりに提出すれば問題はなかった。しかし洪亮吉は私書を作って成親王に進呈し、朱珪と劉権之にも送っていると称したので、それらも併せて提出させた。書内には「先に雍正帝の厳明を模範とし、後に康熙帝の寛仁を模範とする」とあった。小臣でありながら妄りに先代を評価して比べようとした洪亮吉は、狂謬を極めている。また「三月・四月以来、朕が朝政に出るのがやや遅れたのは、俳優や近習が朕を惑わしたためであろう」ともあった。朕は日々政務に励み、毎日臣下らを召し出し、上奏に目を通して。政務に出る時刻は常に守り、宮内も厳粛に保っていることは、宮内にいる諸臣がみな知っており、洪亮吉の建言を細かく取り上げるには値しない。

もし洪亮吉がこのような内容の事柄を自ら上奏してきたなら、たとえさらに荒唐無稽な話

があったとしても、朕は必ずや処罰はせず、自らを省みるために、戒めとしたであろう。今回、荒唐無稽な内容を各所に投じているが、これはどういった心持ちなのか。もし成親王らが書信を進呈しなければ、かえってその内容が事実であり、朕にかわって隠蔽しようとしたのだと思われる。また俳優や近習とはいったい誰なのか、必ず想定している者がいると考え、軍機大臣に命じて取り調べさせたが、全く根拠はなかった。これ以外の事柄についても、また多くが推測から出たものであった。ここにおいて、軍機大臣らの要請を認めて、洪亮吉を解任し、軍機大臣にゆだねて刑部と共に取り調べさせたところ、洪亮吉は一時の誤りから筆に任せて書いたと認めているが、これはどういった発言なのか。

また書信で挙げられていた和珅に阿っていた人々のうち、孫士毅・寶光鼐・李綬らは既に亡くなっている。呉省欽は既に罷免された。蔣賜榮・韓鐸は朝廷の官員に名を連ねてはいるものの、以前のように重用されることはない。このほかに呉省蘭・胡長齡・汪滋畹らは和珅と関わりを持っていたが、朕はこのことを以前から知っている。春に和珅の罪を定めた時、はっきりと命令を下して、和珅に付き従っていた者まで連座させる必要はないと宣言した。どうして洪亮吉の一言で再び追求する道理があるのか。また楊天相の一件については、朕は早くから耳にしていたので、特に費淳らに調査させていたけれども、冤罪の証拠はなかった。もし本当に抑圧されたのなら、事件によって解任され処罰された陳大用や、現在監禁されている林朝相・沈春發らがどうして一言も訴えず、洪亮吉が彼らのためにくどくどと不平を訴えてくるのを待たなくてはいけないのか。また秦承恩が城門を閉ざして難民を入れなかった件については、何度も取り調べて、陝西省の文武諸臣にも問いただしたけれども、実際にそうした事はなかった。そのため特別に釈放して没収した財産も返還した。惠齡は何度も賊の首領を捕らえていたので、侍郎への降格にとどめた。これらはみな命令を下して宣示している。これらの地方を誤らせた官員たちは、必ずや死罪に相当する罪を犯してはじめて、処刑にすべきである。誹謗中傷をほしいままにする洪亮吉のような者であっても、にわかに法に抵触したとはしない。ましてや地方を預かる大官を、どうして罪状がはっきりしないのに処刑できようか。このほかに、貪婪な者として列挙された人々、及びかつて軍機章京の章煦が、朕と師弟の礼を取ろうとしたことなどは、みな伝聞であって、全く証拠がないと供述している。これ以上追求する必要はない。

洪亮吉は妄言を連ね、意図的に誹謗中傷したのであり、軍機大臣が刑部と協議して、大不敬の律を適用して斬立決にすると提案してきたこともまた、自らの罪が招いたものである。しかし朕は諫言を求めており、どうして言論によって人を処罰しようか。【また断じて、言官を誅殺して自らの耳目をふさぐ暗君にはならない。今回、彼の言論を受けて自らを省みて、誤りがあれば改め、なければよりいっそう努力するだけである。】洪亮吉の普段から酒におぼれた放蕩な振る舞いは礼を逸脱しており、儒者としての品格は地に落ちた。無礼にも上を誹ったことは諫言の臣の為すべきものとは比較にならないが、どうして彼に死罪を科して、直言の臣という名声を掠め取らせて、見識のない輩に朕が建言を行った者を殺戮したと

妄りに言わせられようか。ただし近來の風氣を見ると、往々にして議論を好み、根拠のない話を作り出し、詩文を見れば、自ら詩に通じていると自惚れている。これは人心と士習に関わっており、懲戒を示さないわけにはいかない。どうして本朝が最も栄えている時に、明末の陋習を踏襲できようか。洪亮吉は寛大に扱い死罪を免じるが、伊犁に流刑として、伊犁將軍の保寧に引き渡して厳しく監視させよ。三通の書信については、成親王が進呈してきたものは閲覧のために留め置く。その内容は全く影響力を持つようなものではなく、朕が怒り、心持ちをかき乱されて諫言の氣風を阻むようなことは決してないけれども、随時閲覧して、時とともに怠けることのないように心がける。朱珪と劉權之が進呈してきた二通は返却する。留めおいても焼却してもよい。この案件に関する全ての処置を特に内外の臣下に伝えよ⁶。」

・八月二十八日

No.881

嘉慶四年八月二十八日、命令を受けた。「大学士が戸部と協議した内容を上奏した。蔣兆奎（漕運総督）が、州県で漕運米を追加徴収する時、米一斗を手当として旗丁に与えたいと上奏した。州県では余分な漕運米の徴収を一切認めておらず、このことは規定としてはっきりと禁じている。しかし近頃では各省で追加徴収の弊害が多発しており、厳しく調査し取り締まるよう何度も命じているものの、地方官が裏で従っていない恐れがある。今回、蔣兆奎が旗丁の生活費が不足しているのを、章程を明確に作り、一石ごとに米一斗を加増して、手当に充てたいと願い出てきた。これでは不肖の官吏にますます口実を与えることになってしまう。また一斗の追加とは言うものの、徴収する額は必ずこれに止まるものではなく、長年の追加徴収の不正はなお取り除くことができないであろう。新しく漕運米一斗を加えて徴収して定額とするなら、増税と何の違いがあろうか。断じて行ってはいけない。ただ近年、旗丁は疲弊している。蔣兆奎が上奏した内容もまた事実である。各船団の全費用のうち、支給されるはずの食糧や手当分の銀両・米が不足しているのなら、手段を講じて調整し、手当とするべきである。漕運に関連する各省の総督・巡撫は、事実確認と議論の上、それぞれどの様に対応するのかを事実の依拠して上奏せよ。旗丁を困窮させないように務め、また正規の税を増やさないようにして、はじめて適切な対応となる。」

No.882

嘉慶四年八月二十八日、内閣が命令を受けた。「以前より各省の民人は都察院、歩軍統領衙門に赴き、訴えを出していた。その衙門が文書をつくり上奏するものもあれば、各省の総

6 嘉慶帝は、保寧に洪亮吉を監視し、政治批判を行うようであればすぐに捕らえて報告するように命じた（No.880）。

督・巡撫に通知して取り調べさせるもの、そのまま訴えを退けるものがあり、その対応の仕方には三種類ある。このことは彼らが訴えを受け付けるかどうか判断するのに、意図的に軽重を設けているようなものである。現在は広く言路を開き、様々な事柄を広く知ろうと、下々の事情をみな上達させている。もし民からの訴えを勝手に退けていれば、仮に省の総督・巡撫の汚職や無能、要職についている者に関する訴えがあった時、情実にとらわれて握りつぶすかもしれず、賄賂によってもみ消す風習が助長されるであろう。関係するところは小さくない。以後、都察院と歩軍統領衙門は、もし各省からの訴えがあった場合、全て退けてはいけない。重大な案件であれば即座に上奏をし、各省に通知して取り調べさせる案件があれば、一ヶ月、あるいは二ヶ月を区切りとして、訴えの多寡を踏まえて、まとめて報告せよ。また各案件の事情は、上奏内ではっきりと記して朕の閲覧を待つように。もし重大な案件であるにもかかわらず、速やかに上奏せずになぜか省に通知しただけの案件があり、朕が見つけ出したなら、必ず担当部局からの【厳加】議処とする。これを令とせよ。」

・八月二十九日

No.892

嘉慶四年八月二十九日、命令を受けた。「蔡廷衡（甘肅按察使代理兼蘭州道道員）の上奏には、「七月二十日、青海地方で番賊百余名が蒙古管轄下二十一戸の馬や家畜、テントなどを強奪し、章京の巴特嗎ら五名を銃で殺害し、九名に傷を負わせた。また貝子の齊默特依什が番賊に遭遇し、家畜を奪われた。現在、既に西寧に赴き、奎舒（西寧辦事大臣）と共に捜査を行っている」とあった。昨年の冬にダライ・ラマの商人の牛が強奪され、その首謀者であった番賊を捕らえて処罰しようとしているが、一年もたたないうちに当地でまた番賊に蒙古の家畜が奪われ、死傷者を出したのは非常に憎むべきことである。現在、松筠（陝甘総督）は漢中に駐屯しており、この件を同時に処理するのは難しい。蔡廷衡は既に西寧に出立しているので、奎舒と共に速やかに逮捕させよ。当地の番民が賊の首領であって、すぐに強奪した家畜や品々を全て賠償し、畏怖を知らしめたなら、決着させてもよい。もし反抗して従わなければ、すぐに事実を依拠して上奏し、朕の厳しい処置を待つように。この命令を伝えよ。」軍機大臣が命令に従い、甘肅按察使代理で蘭州道道員を兼任する蔡廷衡に伝える。

No.893

軍機大臣が山東巡撫の陳大文に伝える。嘉慶四年八月二十九日、命令を受けた。「歩軍統領衙門の上奏によると、山東省栄城県の民人である王佶らが、彼の兄の王伝が、栄城県知県および書吏が事あるごとに過剰な負担を押しつけて郷民から金銭を騙し取っていると訴えた件について、（京師まで）越訴してきた。この案件は、伊江阿（塔爾巴哈台領隊大臣。元山東巡撫）の任期内に結審したものである。今回、王佶らがその判決を不公正であるとして、

京師に来て訴えてきたのだから、その虚実のほどをしっかりと取り調べて、彼らを納得させるべきである。陳大文に命じて、案件内の証人を集めて公平に厳しく取り調べて量刑を提案させ、少しも私情にとらわれることのないようにせよ。また奏摺の原本を送付し閲覧させよ。この命令を伝えよ。」命令に従い伝える。

No.895

軍機大臣が湖北巡撫の高杞に伝える。嘉慶四年八月二十九日、命令を受けた。「歩軍統領衙門の上奏によると、湖南武陵県の民人である熊若佐が、該県で土地・人丁に応じて常平倉の穀物を買付けさせる際、目減り分として徴収する量が多く、税の過重徴収になっていえると訴えてきた。この案件は、常平倉の穀物備蓄の強制買い付けと、目減り分を利用した税の過重徴収に関するものである。もし事実であれば、必ずや厳しく追及しなくてはならない。倭什布（湖広総督）は現在、省境の防衛に当たっており、兼務する余裕はない。しかしこの案件は姜晟（湖南巡撫）の任期内に生じたものであるため、彼に担当させるのも不適當である。高杞に命じて証人らを集めて徹底的に追求させ、隠し立てのないようにせよ。また原本を送付して閲覧させよ。この命令を伝えよ。」命令に従い伝える。

『仁宗睿皇帝実録』 卷五十

今月。直隸総督の胡季堂が上奏した。薊州でイナゴが再び発生しているが、まだ作物に害を与えてはいない。そこで担当の沈錦が遵化州属の南営村に行き捕獲しようとしたところ、民婦の張章氏が地に跪き、虫は作物を食べていないので捕獲を中止してほしいと訴えてきた。この件について確認したところ事実であった。命令を得た。民婦が害虫の捕獲を止めたのは、イナゴよりも胥役から受ける被害のほうが甚だしいためであろう。イナゴはわずかに作物を食べるだけであるが、胥役の被害はその家にまで及ぶ。総じて、調査を行い慰撫するのが正しい処置である。

おわりに

最後に、八月後半に出された上諭について若干の解説を加えておきたい。

八月十九日には、福長安の処分が決定した。嘉慶帝は福長安を釈放し、拜唐阿として裕陵に行くよう命じたのであった（No.832）。これで和珅、福長安両名の処遇が決着したのである。

八月十六日、嘉慶帝は常平倉に穀物分の銀両ではなく、現物を保管するよう指示を出した。上諭ではこの背景として、白蓮教の鎮圧作戦のために米穀を輸送した際の混乱が指摘されている（No.823）。さらに八月二十日には、劉権之によって、市場価格を無視した安価な穀物

買い付けと地方官による差額の着服、現場で実務にあたる差役らによる金銭要求、富裕層による負担の押しつけといった常平倉にまつわる弊害が上奏された。嘉慶帝はこの上奏を踏まえて、近隣の州県からの市場価格での調達を厳命した。あわせて劉権之は、現地からの寄付によって運営されるはずの社倉も、地方政府が介入し、穀物が流用されていると問題点を指摘した。嘉慶帝はこれについても、政府が運営に関与することを禁じた (No.838)。二十九日には湖南省の民人が来京し、地方政府が常平倉の穀物を買付ける際、目減り分を過剰に徴収しているため、実質的な二重課税になっていると訴えた。嘉慶帝は徹底的に調査するよう命じた (No.895)。

常平倉の穀物備蓄にまつわる不正や過剰な徴収は、以前からのものであって真新しい事象ではない。無論、地域社会にとっては深刻な課題であったといえようが、本稿では親政初期には、皇帝主導による善政を強調するための材料として取り上げられた点に着目しておきたい。

なお八月二十八日には、漕運総督の蔣兆奎が漕運米の徴収量を増やし、運搬にあたる旗丁への手当にしたいと上奏した。嘉慶帝はこれを実質的な増税と変わらないと退け、同時に旗丁の待遇改善についても検討するよう総督・巡撫に指示した (No.881)。

八月十八日には、知州の劉清に知府の職銜を与えた。これは広興と共に軍糧の処理を担当するためである (No.830、実録)。劉清はこの後、四川按察使・山西按察使・山東塩運使を歴任する。巡撫や総督にまでは登れなかったが、按察使クラスの地方大官として嘉慶帝に仕えた。しかし洪亮吉はこの劉清の抜擢を評価しておらず、成親王らに投じた書信のなかで彼の能力に疑問を呈した。

その洪亮吉の書信が嘉慶帝にまで届けられたのが、八月二十五日である (No.867)。翌日には、朱珪と劉権之も洪亮吉の書信を受け取っていたことを申し出て、自ら処罰を願い出た (No.870)。軍機処は、洪亮吉の書信の内容に批判を加え、あるいは論拠がないと反論し、「洪亮吉はいずれもみな伝聞にすぎないと称し、全く事実関係を指摘できなかった」と、建言の内容そのものが不確かで誤謬に満ちたものであったという結論を下した。そして内容だけでなく、「広く言路を開いている今は自ら封章を提出すべきであるのに、役所を通じて代奏してきた」点もあわせて、斬立決にするよう提案した (No.874)。

二十七日には、嘉慶帝からの処断が示された。嘉慶帝はまず、「もし上奏すべき事柄があるのなら、もとより自ら封章を準備して朕の前に直接届けるか、翰林院掌院学士や面識のある大臣が代わりに提出すれば問題はなかった」と提出方法を問題視した上で、内容についても退け、洪亮吉を伊犁への流刑とした (No.879)。あわせて伊犁將軍の保寧には、洪亮吉の監視を指示した (No.880)。

嘉慶帝は親政以来、奏摺の内容が事前に漏れることなく、皇帝にまで直接届けられることを強調していた。嘉慶帝が奏摺の機密性や、皇帝と官員との一対一のつながりをことさらに強調したのも、乾隆末に和珅が奏摺の内容を事前に確認していたからである。広開言路と

は、ただ漢人知識人からの政策提案や政権批判を受け付けるためだけのものではなく、政策決定、皇帝の存在感を強調するための施策であったといえよう。そうした中で、洪亮吉が嘉慶帝に建言を提出するのではなく、成親王・朱珪・劉権之といった政権の中枢にいる実力者に取り次ぎを依頼したことは、嘉慶帝の怒りを買った一因となった⁷。

嘉慶期の京控については、これまで有意義な研究が蓄積され、京控の増大が地方政治への過重な負担になっていた過程が明らかにされている⁸。この京控の始まりとなったのが、都察院と歩軍統領衙門に全ての京控案件を受け付けるよう命じた八月二十八日の上諭であった（No.882）。

八月二十一日には江蘭が、直隸の拱極・良郷に設けられた塘撥（兵士の駐屯所）で、一人の兵士もいなかったと上奏した。駐屯所の兵士の不在ということ自体は、特殊なものではない。しかし拱極・良郷の場合は、後にこの地域で盗賊団が出現したこともあって、直隸総督の胡季堂の立場を悪化させる一因となる（No.844）。

八月二十二日には山海関において税銀として徴収した銀の余剰分の処理について処理が問い合わせられ決定されているが、親政以降の盈余銀に関する改革の一環とみることができる（嘉慶四年三月のNo.300参照）。

八月十八日には、安徽省の鳳陽・泗洲での水害救済を命じる上諭が出された（No.828）。二十四日には、陳大文が山東で発生した水害の状況を報告し、嘉慶帝は被災地域の税と漕運米の徴収延期を命じた（No.858）。二十七日には、やはり水害を被った河南省睢州でも税と漕運米の徴収延期を命じた（No.878）。このような水害が発生し、対策を命じる一方で、八月二十三日には、雲南の石屏州で発生した地震の救助活動についての報告が寄せられる（No.856）。地震発生時の救助活動については、2008年の四川大地震以降、中国大陆でその復興過程に着目した研究が積み重ねられつつあるものの⁹、さらなる研究の進展が望まれる領域であるといえよう。

八月二十五日、江蘇巡撫の宜興弾劾についての続報が届けられた。注目したいのは、錢樾が馬照・袁仁虎・王元辰ら三名の生員の衣冠・頂戴を返却した件について、嘉慶帝は「人気取りをしようと劣悪な生員らを庇護したのであれば、将来彼らが今回の件を恃みとして問題を起こし、地域を牛耳るようになった時、錢樾も必ず連座させて罪に問う」、「馬照ら煽動した首謀者については、得るべき罪があるので、玉徳らに命じてあわせて処分案を定めて上奏させよ」と命じている点である（No.866）。すでに六月上諭についての解説¹⁰で触れたとおり、

7 常冰霞は、嘉慶帝が機密性を重視していた点を踏まえて、洪亮吉の提出方法が問題であったと指摘する。常冰霞『清代的信息伝達と科道監察（1644-1820）』人民出版社、2019年、204頁。

8 たとえば阿風（井上充幸訳）「清代の京控」夫馬進編『中国訴訟社会史の研究』京都大学学術出版会、2011年など。

9 たとえば、曾桂林「雲南の地震災害と社会対応：1659-1949」『中国地質大学学报（社会科学版）』2011年第3期、周瓊・高建国『中国西南地区災荒与社会変遷』雲南大学出版社、2010年所収の論文など。

嘉慶帝は漢人知識人からの指示調達を視野に、漢人知識人への配慮を行っていた。しかし、一方で生員など、地域社会の有力者は清朝統治への協力者であると同時に、各種非公式の手数料を徴収して、時に清朝の清朝統治の障害たる存在であり、しばしば胥吏とともに批判の槍玉に上がる存在でもあった。彼らに対する一辺倒の肩入れというのは行い難く、上記の上諭は常にバランスを意識していることを強調したものと言えるだろう。

親政当初の嘉慶帝にとっては、軍の統制を如何にして実現するかも課題であった。八月二十六日には、順治帝の『世祖実録』を引き合いに出し、総督・巡撫らに軍隊の綱紀肅正の徹底、武器や馬の点検、兵士の戦闘目的以外への転用を禁じた (No.869)。

八月二十九日、青海地方でモンゴル人の馬やテントが「番賊」と書かれる百名を超える集団によって奪われ、死傷者まで出るという強奪事件が発生し、嘉慶帝はすぐさま蔡廷衡に対処を命じた (No.892)。この事件への対処は、九月から十月初にかけて行われてゆく。白蓮教反乱を抱え軍事介入という選択肢は取れない嘉慶期の青海地方への対処や、現地の社会状況といった問題もまた、清朝の統治構造の変遷を考えていく上で非常に興味深い。

10 『嘉慶四（1799）年六月上諭の訳注及び考察 清朝嘉慶維新研究序説』（『環日本海研究年報』25、2020年）